

---

# 小さな小さな物語

此道 遊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さな小さな物語

### 【Nコード】

N0359F

### 【作者名】

此道 遊

### 【あらすじ】

ごく普通の少年、亮太郎が日頃良く訪れる神社で出会ったのは関西弁全開の元気印の少女桜花であった。

## その1 1パート（前書き）

はじめまして、此道 遊と申します。

この文章は、私が所属しているサークル「あきないやほんぽ」にて頒布している同タイトル「小さな小さな物語」と同一の作品です。少し変わった内容となっておりますが、宜しければお付き合い下さいませ。

## その1 1パート

「コッソ」と僕に何かが当たる。

何かなと思ひ振り返ると、例のごとくクシャクシャに丸められた紙切れが僕に当てられた様であつた。

ふう…またか…

クラス全体の冷たい視線がヒシヒシと伝わってくる。

僕こと清原 亮太郎は、どうもクラス全員からの無視と無言の嫌がらせというイジメに遭っているみたいだ。

「みたいだ」と表現するのは変なのだろうけど、僕自身があまり気にしていないからだろう。

両親の仕事の関係で転校を繰り返しているのでクラスに余りなじめず、無視されるなんていうのは日常茶飯事だからだ。

この学校にも、4月の新学年が始まって数日してから転校してきたから馴染めるはずも無い。

オマケに何かに優れている訳でもないからこれと言ったとりえも無い、ごく平凡な中学生だから人気者にもなれやしない。

こういう風にやる気も無い、みんなから嫌われ無視される中学校生活も良いものかなと最近思うようになってきた。

「起立！礼」

今日も何事も無く授業が終了した…

クラスみんなは楽しくおしゃべりをしているが、僕に声をかけるクラスメイトはいない。

無言のイジメに遭っているみたいだから当然よ言えば当然なのだが、僕は無言のままクラスを後にする、どうせ友達もいないのだから掃

除当番でも無い限り長居する必要も無かった。

「今日も…行こうか…」

学校の校門を出ながら呟く。

ここに転校してきて見つけた趣味の読書以外の僕だけの時間…誰にも邪魔されない空間へ。

誰も居ない家に帰り制服を脱いで私服を着て再び家を出る。

近くの商店街を抜け、路面電車の踏切を渡るとそこに目的の場所があった。

「車折神社<sup>くるまどきじんじや</sup>」という神社である。

歴史は相当古いらしく平安時代まで遡る事が出来沢山の小さな神社もある上、全国でも珍しい「芸能神社」という芸能を司る神社がある。

その為かこの神社には有名人の名前が多く見受けられ「こんな人もお参りしてるんだ」とか見て歩くのも結構楽しい。

それにこの神社には4対もの狛犬が有ったりもする、しかも色々な姿形で。

古びた石作りであつたり

木製で綺麗に色が塗られていたり

怖そうな顔をしていたり

優しそうな顔をしていたり

そんな色々な表情を見るのも楽しい。

しかも結構な都会の中に有るのに、ここだけは時間の流れが穏やかに感じる。

そついう密かな楽しみを見つけた僕は、最近良くここに来ているの

だ。

## その1 2パート

自転車を神社横の駐輪場に止め神社内に入ると、そこにはいつも変わらないピンと張り詰めた空気とゆったりとした時間が流れていた。僕にとつて心地良い空間をゆっくりと歩きながら本殿に入ると、そこには珍しく先客がいるではないか。

先客はごく普通のブレザータイプの学生服を来た女の子であった。年格好は僕と同じ位だろうか。

目を瞑り神社の本尊に対してお祈りをしていたのだが、その姿は他人に余り関心を示さない僕でも印象に残る姿…

凜とした姿勢、どこかのグラビアとかで出て来そうな位可愛い顔、どう表現したら分らないけど頭に少し変な癖のある茶色目の長い髪。

そして変な言い方になるけど、そこにずっと立っていても違和感を覚えないくらい辺りに溶け込んでいた。

その姿に、僕は彼女のお祈りが終わるまで入り口で立ち尽くしてしまった。

もしかしたら「邪魔をしたくない」とか「この姿をずっと見ていたい」という意思が働いたのかも知れない。

一分ばかりするとお祈りが終わったのか、彼女は目をゆっくり開けこちらを振り向いたかと思うといきなりであった。

「こんにちわー」

「こ…こんにちは」

「元気ないなあ、どうしたん？」

「いや、いきなり話しかけられたものだから…」

誰だっで見ず知らずの人にいきなり話しかけられたら警戒もしてしまう。

それに、決して人と話をするのが好きでは無いと言うのも有るのだ

が…

「そんなもん関西人って言うたら、みんな兄弟みたいなもんやん」

「そんな事言われても…それに最近ここに引っ越して来たばかりだし」

「ふーん、そうなんかあ」

彼女は少し残念そうな顔をした。

「ところで…」

「なんや？」

「名前もお互い知らないのに随分馴れ馴れしいと思うんだけど？」

「そりゃ…」何か言いかけて彼女は詰まった

「それは？」僕は再度問いただす。

「うちが元氣印な関西人やからや！」あっけらかんと彼女は答えた。  
ガクッ…思わず答えに力が抜けそうになる。

「そ、それは理由にならないと思うけど？」

「そうかあ？ならうちは三船桜花、中学二年生や、よろしゅうなあ」

「僕は清原亮太郎、君と同じ…」

「ちょいまちいな、せっかくうちが名前言ったのに「君」は無いんちやう？」

彼女は少し怒った様子であった。

僕が表情の変化に乏しいせいかも知れないけれど、彼女の表情の変化の激しさに少しとまどっている。

「な、ならどう言えば？」

「うーん、そやなあ…「おうか」でいいねん！」

「そんな、いきなり初対面の人に呼び捨てなんて出来ないよ」

「いやや、うちは「おうか」って呼ばれんと嫌やねん！」

ここまでくると単なるダダッ子の域の様にしか見えなそう思いながら、僕は頑張って言葉を振り絞ってみた。

「桜花と同じ中学二年生だよ」

「よく言えました亮太郎」

彼女は満面の笑みを浮かべながら返事をしてくれる。

「いきなり呼び捨てって…」

余りにもフレンドリーさに僕は絶句するしか無かった。

「まあいいやん、人間って堅苦しい事ばかりしてたらいつまでも自分の殻って破れへんねん。たまには気楽にならなあかんで」

「確かにそうだろうけど…」

彼女の最もな正論に僕は返す言葉も無い。

事実、友達らしい友達がいないのも僕が転校ばかりしているから「友達なんていない」と考えているのもあるかも知れないのだから…

「ところで亮太郎」

「なっ、何？桜花ちゃん」

「桜花ちゃんやない、お・う・か！」

「ゴメン…」

「今回は許してあげる、けど代わりにうちをその電車の駅まで送って行って欲しいんや」

へ？何故そう唐突に事態が進むか全く意味不明なのだが…

しかも、僕と彼女はつい何分か前に出会った初対面同士なのである。

「なぜそんな突然…まあいいけど」

「ありがとっ、なら行こう！」

と言っなり彼女は振り返ると僕が来た道を歩き始め、僕はすぐ後を歩き始めた。

## その1 3パート

「と、ところでさ桜花ちゃ…桜花？」

後ろを歩きながら僕は桜花に質問してみた。

「ん？なんや？」

「電車の駅までって今言ってたけどここから遠いの？」

僕にとってはごく普通の疑問だ。

この神社は有名とはいえ普通は近所の人か、芸能関係者位しか訪れないのである。

そんな場所にわざわざ電車で来ると言うのも、少々変わっていると  
言えば変わっている。

「ん…まあ、遠いって言うのと遠いわなあ」

「何故わざわざ来るの？」

桜花が少し考え込んだ様子だった。

「それはなあ…」

「それは？」

「ここがうちにとって「思い出の場所」やからかなあ」

「思い出の場所？」余りにも意外な答えだったので聞きかえしてしまった。

「そうや、誰にでも有るんちゃうかな？そんな場所が」

「ふーん…そんなものかな？」

「亮太郎にはそんな場所はないんか？」

「僕は両親の関係で引越が多いからそんな場所が思い浮かばないなあ…」

「そうかあ、なら亮太郎？」

「何？」

桜花はくると僕の方に振り返って

「ここを思い出の場所にしたらいいんちゃうの？」

「え？」

キンコンキンコン

電車の踏切がけたたましく鳴り出し到着を予告していた。

「あ、電車が来たみたいやなあ。今日は楽しかったわ、ありがとうなあ」

いきなり桜花は別れの挨拶を告げだした。

正直、僕にも何がかさつぱり分からない展開ぶりである。

「また明日も来るさかい、そのときゆっくりまた話そ！じゃあまた明日なあ！」

と言いながら僕の返事を待たずダッシュで電車に駆け込んで行き、見送る間も挨拶する間も無く電車が発車していった。

## その2 1パート

「そうかあそんな事も有るんやなあ」

「うん、そうなんだ、桜花ちゃん」

「あー、また言った亮太郎！なんべん言ったらわかんねんな！」

「あつ…ゴメン」

「今日もバツとしてまた送って行ってなあ」

「分かったよお…本当に」

桜花と出会ってから一ヶ月、毎日神社に訪れ端から見ると「下らない」と言われそんな会話をする毎が続いている。

別にこれといって決まった話題とかじゃ無く、日々の暮らしの事や学校の事なんかのささいな話題ばかりであった。

僕の気持ちの中でも最近ここへ来る目的も変わってきていて、神社の中のゆったりとした時間を楽しむ為では無く、桜花と出会って会話をしたいという思いになって来ている。

またこうして桜花と色々な会話をしているからかどうか分からないけど、少しずつ学校でもクラスメイトと会話が出来るようになってきた。

もつとも、まだ友人と呼べるような存在はいないけども、友人と言えそうなのが出来るのもそう遠い日では無いだろうと思う。

「あー！そうや！」

桜花が何かを思い出したかの様な声を上げながら手をポンと叩いた。

「ところで亮太郎」

改まった表情で桜花は僕の方に向いた。

最近、真面目な顔でこちらを向かれると思わずドキツとする。

別に「好き」とかいう感情で無く、何か「気になる」というのだけでも。

「ん？ど…どうしたの改まって？」

「うちが改まった顔したら悪いんかいなあ」桜花はぷいと小さくむくれた。

「いや、そうじゃなくて、ちょっと驚いただけだから」

僕は桜花をなだめる。もう本当に「天真爛漫」という言葉がぴったりにくる。

笑う・怒る・悲しむ・真面目になる…

色々な表情がコロコロと変わる、その度に僕もなだめ・共に笑い、そして悲しむ。

そんな毎日が有るから桜花と毎日の会話を続けているのだけれども…

「何か趣味が何か有るん？」

「どうしたの、いきなり？」

「うん、ずっと聞こうと思ってて忘れてたかたと思ってなあ」

そう言われて僕は色々と考えてみたが…

「趣味？うーん…本とかは良く読むけども…これといったものは無いね」

良く読書はするけども趣味と呼べるものでも無いし、他に思い出せなかった。

桜花はにへら笑いを浮かべた。

マ…マズイ

本能的に「何か有る」と僕の中の危険信号が点滅する。

この一ヶ月色々な会話をしてきたが、桜花がこの表情をした時は口くさな事がなかった。

一番最近この表情した時は、無理矢理ジャンケンをさせられた上「亮太郎が負けたから」とか言ってたこ焼きを奢らされたっけか。

「なら丁度良かったわ」

「丁度良かったって？」

「うちなあ、最近アトリエに通ってんねんよ。良かったら今度の木曜日見に来る？」

へ？何じゃそりやと思ひながら、僕は訝しげに問い返した。

「アトリエって、絵とか書くアトリエ？」

「それ以外に何が有るんよ」

「いや、確認までにね…で、なんでまたいきなり僕を誘うの？」

「誘って悪い？」

「悪いと言うわけじゃ無いけど、どうしてかなあと」

「そりや、何かやりたい事を亮太郎が見付けるのにやけど？」

何か凄くこじつけのような気がするのだけと思いつつ…

「……分かったよ、行かさせてもらうよ」こう返事するしか無かった。

別に断る理由も無かったし、ここで出会う以外の表情を見たいという興味も合ったから。

「やった！うれしいわあ。なら木曜日にここに来てな！」

と桜花は地図を書いた紙をポケットから取り出して僕に手渡した。

「……えらく準備がいいね？」

「え？何の事や？気にしたら負けやねんよ」桜花はとぼけた顔をする。

「因みに「趣味有る」って答えたらどうするつもりだったの？」

「そりや……」

「それは？」

「「ここへ木曜日来てなあ」って言うて地図を渡すだけよ」  
胸を張って開き直った答える。

「いずれにしても僕には拒否権は無かったんだね」

「まあいいやん、たまには。さあ、駅までお見送りよろしゅうなあ」

何かはめられた様な…

## その2 2パート

木曜日、僕は学校から帰って来るなりいつもの様に制服を脱ぎ外に出た。

ただ行き先は何時もと違い、桜花に渡された地図を片手に自転車を走らせる。

いつもの商店街を抜け少し走った所に目的地は有った、それはこぢんまりとした教会だった。

「こんな所で？」という疑問があり、何度も地図を見返したが地図はここを指し示しているの有る。

まいっかと思いつつ僕は教会の中に入った。

そこは僕がいつも行く車折神社と同様、静まりかえった空間であった。

ただ建物の中なので、いつもと空気は少し違う感じはするけども落ち着きは変わりなかった。

小さな教会の中にはブルーシートが敷かれ、小さな子供達が数人思いの絵を描いているではないか。

キヨロキヨロと探すものの、その中には桜花の姿は発見出来なかった、確かにここで間違えない様だが…

「どうしたの？」アトリエの先生らしき初老の男性に声を掛けられた。

「あ、実は三船桜花さんからここに来てねと声をかけられました…」

「ああなるほど、君が桜花君が話していた彼か。なるほどなるほど」男性が妙に納得している。

「なるほどって？」変な疑問が浮かぶ。

「まあ、いいじゃないか。それより彼女は隣の部屋にいるよ」

礼儀的なお礼を述べ、隣の部屋に繋がるドアをあけると

桜花は絵を描いていた。

声をかけるのも憚られる位の集中…

そう、何かに憑かれるような感じで黙々と…

僕は近くにある椅子に座り桜花が気付くのを待つことにした。

一ヶ月一緒に居たけれども、こんな集中した顔をしている桜花を見るのも初めてだ。

そんな桜花の表情を見ているのも楽しいものである。

窓に写る景色が赤く染まる頃…

桜花はふと我に返ったみたいでこちらを振り向いた。

「あつ、来てくれてたんや亮太郎。声くらいかけてくれてもいいのに」

済まなさそうな表情で僕の方を見ている。

「いや、いいよ。集中していたみたいだから声もかけにくかったし」

「そうかあ、悪い事したなあ」

「絵を描くのが趣味なの？」

「そうやなあ、うちの集中できるただ一つの趣味やなあ。そんなんを見てもらおと思って呼んだんやけどなあ」

「見てもらおうと思つて？」

「そや、人間誰でも集中出来るモノが有ったら変わるていうし。それに…」

珍しく桜花が口をつぐんだ。

「それに？」

「うっん、なんでもあらへん…そや、亮太郎って良く本読むよなあ？」

「読むけど…それがどうかしたの？」

「一回自分で書いて見たら良いと思うねんけど…」

真剣そのものの眼差しで桜花は僕の方を見つめる…どうも本気で言

っているみたいだ。

確かに文章を書く人は人一倍読書をするというのだが、書く読むとでは実際大違いである。

どのような内容にしても、何より考え無ければならない。

設定にしろ、内容にしろ、人物像にしろ…

僕も一度何か書きたいと思って考えて見たが、余りにもの難しさの為投げ出した経緯がある…

「うーん…簡単に言われても…大変だし…その…」

「そんないつまでも態度が煮え切らへんから友達も出来ひんのとちやうか？人に勧められたらまず素直に頑張ってみる。この一ヶ月亮太郎の事見てきたけど、それが一番足りひんところ違つかなあ？」

「うつ…」

正直凶星だった。

頑張らない、関わろうとしない、やろうとしない…

だからいつまで経っても変わらない…いや変わらないという方が正確だろうか

「まあ、うちがこんな事言っても本人が変わらんとあかへん事やしなあ」

少しバツの悪そうな顔をしながら桜花は片付けを始めた。

自分のやりたい事って一体なんだろ…

自分が本当に集中出来る事ってなんだろ…

その後寝るまでこの言葉が頭にこびりついて離れなかった。

### その3 1パート

桜花とのアトリエの件以来、僕は少しずつたけども色々文章を書き出す事をはじめた。

自分のやりたい事ってなんだろう？

これのある意味自分なりの答えでも有った。

元々本を読むというのが好きだったから「想像する」という行為は思ったより簡単に出来た。

ただ「文字を書く」という行為は正直かなり苦戦している。

何しろ「想像を上手く膨らませる」と「それを上手く表現する」というのは、改めて全くの別物だと言うのを痛感している。

最近では、色々書いたものを日課桜花に見てもらった。

そして、ダメ出しや喜んで貰う…そんな日常が続いている。

あの日の桜花の真剣さに感化された…というより半分はめられた感はあるのだが、週一回木曜日にアトリエに通い絵を描き始める事になった。

初め僕が両親に向かって「アトリエに行きたい」と言ったときは「お前が自分から習い事をしたいと言ったのは初めてだ」と驚かれたのだが、二つ返事で行かせてくれる事となった。

そんな日常を続けていた夏休み前の有る日の事で有った「それは唐突に始まった。

その日は、セミの大合唱の聞こえる神社の中の木陰で二人へばっている時であった。

「亮太郎」

暑さにうなだれる桜花のやる気なさそうな声が僕を呼んだ。

「何い…しかし、この地方の夏って本当に暑いね、死にそうだよ」

「まあ、この地方で一年生活出来たら、世界中どこに行っても平気と言つた気候は厳しいさかいになあ」

「そなの？」

「そやで。夏は蒸し暑いし、冬は床冷えする。どっちの季節も体感温度は極端なんや」

「ふーん…しかし何かしたいけど…やる気力が起きない位の暑さだね」

「そやなあ…」

桜花は何か少し考えていたかと思うと「パン！」と手を叩いた。

「そや！日曜日デートで観光地巡りしよっ！」

満面の笑みを浮かべて僕に提案を持ちかけて来た。

このとても暑い最中にデートですか？と思わずぼやきなくなる。むしろ丁重に遠慮したい位だ。

「何故に？日曜日以外毎日会っている様な気がするけど？」

試しにやんわりと牽制してみる。

「いいじゃない。二人で観光地やデートスポットなんて今まで行った事ないでしょ？」

「まあ、それは確かにそうだけど…ここも立派な観光地だと思うけど？」

「他の人にしたら観光地だろうけど、うちらなら日常ちゃうの。だから別の観光地巡りをするの」

…観光地に住む人間に対しての、ある意味最高の殺し文句である。

元来、観光地に住んでいる人間はそこが「観光地」という認識が薄い。

他の土地から来た僕も当初は「どれだけ観光地巡ろうか」なんて考えてもいたが、いまでは「いつでも行けるからいいや」とか思ってたともに巡った事も無い…

「…ごもつともで」

僕もこれ以上の抵抗も無駄だと判断して白旗を揚げるしかなかった。

「なら決まりね！今週の日曜日にここで九時に待ち合わせで」

「九時って…お昼どうするの？」

「この桜花様に任せなさい！ちゃんとお弁当用意してあげるから」  
本当いつも桜花は強引だなと思いつつ、少し楽しみにして日曜日を待つことになった。

もちろん、その間も日々の日課は欠かさず土曜日に至っては  
「時間に遅刻したら死刑だからねっ！」と念押しされもしたが…

### その3 2パート

日曜日、僕は指定された時間より少し早く着いたのだがもうすでに桜花は到着していた。

「おそーい！りょーたるー！」

「ごめんごめん」

「せっかくレディが誘ってるんやから、ちゃんと時間前に到着しかんとあかんで」

「って言われても…まだ時間前だけど…」

僕は少し抵抗を試みる、そりゃそうだ約束の時間よりは早く来ているのだから。

「余計な口を利くのはこのお口かなあ？」と言いながら桜花は僕のほつぺたを抓りだした。

「いふあい！ぎよぎよめん！」たまらず無条件降伏…全く情けないものである。

「まあいいわ、分かればよろしい。ほな行こうかあ、今日はうちがたっぷり観光地案内するさかい」

デートと言っても中学生同士のささやかなデートである。

いつもと変わらないおしゃべりをしながら、何箇所かのお寺や資料館を見て歩くだけでも。

「うちの特製弁当や」と言って出されたのは、形がボコボコの大きなオニギリだった…

そんな楽しい一時も夕方近くになってきた頃、この街の一番有名な橋が一望出来る所に来た。

「ここが渡月橋が一望出来るところや。橋の歴史は案外古うて千二百年も遡ることが出来るんよ」

「ふーん、そこまで歴史持つてるんだね…あの橋…なら二人で渡りに行かない？」

「嫌やつ」桜花は笑いながら僕に返事をする。

「嫌って」

「あそこだけは嫌やねん！」桜花はだだをこねる。

「まあ…いいかあ」

「そうそう、レディの言う事は聞いとく方がいいねん」

「じゃあ、別のところに行こう」

僕は少し残念に思いながら諦めることにした。

「そうそう、男はあきらめが肝心やねん。さあ別の所に行こうか」

「そうだね」

と、二人で踵を返した直後であつた。

音もなく桜花が崩れ落ちる様に倒れた。

僕は慌てて桜花の上半身を抱え上げる様に持ち上げる。

「桜花！桜花！」

何度も呼ぶが、桜花に反応はなかった。

試しに桜花のおでこに手を当ててみる。

「凄じ熱じゃないか！どうしてだまつ…」

叫んでいる最中のことだつた、今までに経験した事のない感覚が僕の頭の中によぎる。

上手くは言えないが「現実に見える」という感覚では無く「過去のものが蘇る」という感覚だつた。

### その3 3パート

そこはまるで、いつも二人でいつもおしゃべりをしている車折神社そのものの様な場所だった。

ただ、今の神社とは決定的に違うのは、「寂れた感覚が無い」のである。

また時代の感覚も違っていた。一言で大昔と言えばそうかも知れないが、そうでもない。

いずれにしても不思議な空間が僕の目の回りに見えているのは確かだった。

そんな建物の中を見ると、一人の人物を八人の人間がぐるりと円をなすような形で座っており服装も和装・洋服・中華風と色々であった。また年・風貌もみんなバラバラで老若男女問わずという構成でもある。

「主上、そろそろお時間でございまする」

「そうじゃな、始めるとしようかの」

中心の人物が話しを始めた。

顔までは見ることが出来なかったが、声を聞く限りはかなり若い男性の声であった。

「今日集まって貰ったのは他でもない。そろそろ皆も、代わりしてもらわないといけない時になってきたようじゃのう」

一番中心にいる人物が口火を切る。

「たしかに。主上の生命は永遠ですが、それをお守りする我々の寿命は有限ですからのお」

周りを囲む人物の一人が答えた。

他の七人も同様に同意しているという感じで有った。

「では、桜花よ。まずそちが一番最初に人界に降りて準備をしてくれぬか？」

と中心の人物が命令を下す。

「拝命いたします、主上。では人界に行って役目果たして参ります」とお辞儀をして顔をあげると…

そこにいるのは桜花そっくりの女性ではないか？

蘇って来る様な感覚が途切れた瞬間、桜花は目を覚ました。

「大丈夫か？桜花！」僕は桜花に呼びかける。

「ああ…倒れてしもたかあ…うちの正体知られたみたいやなあ」弱々しい声で桜花は答えた。

「今のは何？」つい今「見えた」景色について質問してみる。

「あれがうちの正体や。信じられへんやろけど、うちは人間やあらへん」

「人間じゃ無いって…」

「うちのはあの神社を守る八体有る狛犬の一人なんよ」

確かに神社には四対・計八体の狛犬が有る。

「うちの寿命って有限でなあ。子孫を残さんと神社を守って行けへんのよ。そこで人界に降りてきて子孫を作るんよ」

「そんな話信じろって言われても…」

正直困惑するしか仕方がなかった、何しろいきなり「自分の本当の姿は狛犬です」と言われても信じられる訳がない。

「そりゃ、そうやるなあ。うちも、こんなに早くこの話をするなんて思ってたんだし…」

「思ってたんだしって…言い方が何かおかしいような…」

「そうや、第一何もかも上手く行きすぎていると思わへんか？いきなり活発な女の子が現れて男の子の事を色々強引に引っ張っていく。そして男の子が段々成長していくし女の子との関係も良くなっていく…まるで何かのアニメか小説みたいな展開やと思うやろ？」

確かに、そう言われると何もかもが唐突に展開している様にも思える。

出合い・日常・アトリエ・デート…

さらに今までの会話を考えると桜花の生い立ちも聞いた記憶がない…

「確かに…」これが僕の精一杯の返答だ。

「そして、うちが子孫をつくるのに「この人がいい」って決めたのが亮太郎やったんよ。だから今正体を明かすとは「思ってたなかった」という言い方はが正しいんよ。」

「何か…話がとても強引な様な気がするんだけど…」

僕は困惑の表情しか浮かべられなかった。

「まあ、いいねん。ぼちぼちこの事は話して行くさかいに…」

「さかいに？」

「こんな変なこと言ったり、亮太郎を困らせたりするのが大好きな女の子やけれども、これから一緒にいてくれるか？」

「それは…」

「それは？」

## その4

作業に一段落がついたので、私は軽く伸びをした。

しかし作家家業というのも結構大変なんである。

ふと机に有るフォトスタンドに目をやった。

「あれから二十五年か…」ふと独り言の様に呟く。

バタバタと廊下を走ってくる音が聞こえて来て、その音が途絶える音が途絶えると「バン」と勢い良くドアが開く音が聞こえた。

「おとーさん！」

小さな子供の元気の良い声が私の仕事場に響く。

「どうしたんだい秋花？」

「なにかおもしろいおはなしして！」

「うーん、そうだね…じゃああのお話をしてあげようか」

「ありがとー、おとーさん！」秋花は私の元に駆け寄ってきた。

「で、なにのおはなししてくれるの？」

「それはねえ、ある男の子が女の子に出会って成長していくお話だよ」

「ふーんおもしろそう！早くはじめて！」

「はいはい」

「これでお話は終わりだよ秋花」

「ふーん、ありがと、おとーさん！けどへんなおはなしだね」

秋花は不思議そうな顔をしていた。

「そうかい？」

「うん、だってこまいぬが人間にへんしんしてなんかへんだもん」

「そうでもないと思うけどね…」

「それで、そのおはなしのあとふたりはどうなったの？」

「仲の良いまま大きくなって結婚して、一人の女の子をつくったん

だ」

「その女の子は？」

「その女の子って、お父さんの目の前にいるじゃないか」

「えっ？あたし？」きょとんとした目で答える。

「なら今までのおはなしって、おとーさんとおかーさんのむかしはなし？」

「そうだよ」別に否定するまでもないので素直に答えた。

「うそぉ？」

「本当だって。…それだけ疑うなら少し試してみるかい？」

「うん！」

「じゃあ、目を瞑って…」

「こう？」

「いくよ…いち・にい・さぁん…ハイツ！」

「何がかわったの？」

「いいから鏡を見て見なさい」

「うん！」

秋花はゆっくり鏡を見て見た。

「なにがかわって…」

「えっ…」

「えーーーーーーー」

#### その4（後書き）

これにて、このお話は完結です。

拙文に長々とお付き合い頂きありがとうございました。

多分、随分途中が無い印象が有るかと思います。

かなり圧縮した感があります。

しかし実はまだ、続きが有るんです。

それはまた書き上がった時にお目にかかりたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0359f/>

---

小さな小さな物語

2010年10月9日22時26分発行